

princess  Lover!

プリンセスラブ!

シャルロット=ヘイゼルリンクの恋路

空蟬

原作：Ricotta / 表紙：こもりけい / 挿絵：吉飛雄馬

立ち読み版





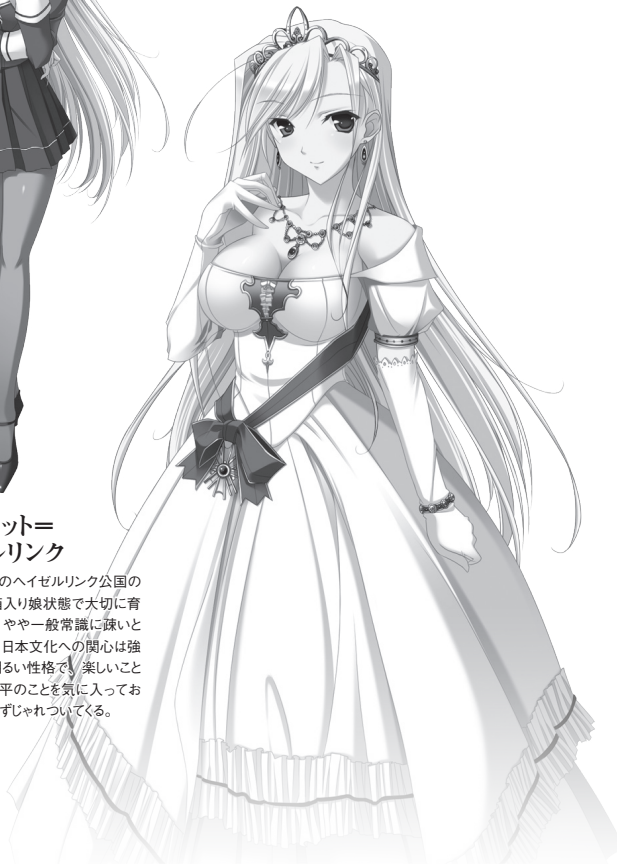
登場人物紹介

Characters



シャルロット＝ ヘイゼルリンク

日本に留学中のヘイゼルリンク公国の第一王女。箱入り娘状態で大切に育てられたため、やや一般常識に疎いところがあるが、日本文化への関心は強い。気さくで明るい性格で、楽しいことが大好き。哲平のことを気に入っており、ところ構わずじゃれついてくる。





シルヴィア＝ ファン・ホッセン

代々騎士を務めてきたファン・ホッセン家の長女。真面目を通りこして堅物だが純粋でまっすぐな性格の持ち主。

ほうじょういん せい か 鳳条院 聖華

秀峰学園の社交部代表。新進気鋭のファッションデザイナーでモデルもこなす才女。



マリア＝ ファン・ホッセン

シルヴィアの妹。明るい性格の女の子で恋愛に興味津々なお年頃。

ふじくら ゆう 藤倉 優

有馬家に仕える哲平の専属メイド。細やかな気配りで主である哲平を支える。

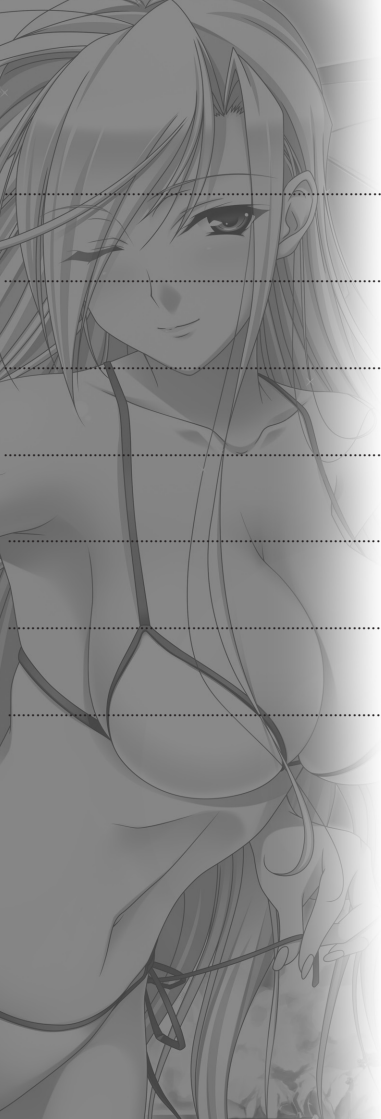


アルフレッド

ヘイゼルリンクに仕える執事。シャルロットにつく悪い虫に容赦はない。

ありま てっぺい 有馬 哲平

祖父・一心の息子として、有馬グループの跡取りとなった新米セブの少年。



CONTENTS

◎序幕 あなたと会ったその日から	7
◎第一幕 楽しい学園生活	23
◎第二幕 普通の女の子のように	54
◎第三幕 あなたのために、できること	89
◎第四幕 大切な贈り物	129
◎第五幕 愛しいあなたといつまでも	190
◎最終幕 どこまでも続く、未来	246



狂おしいまでの愛しさに突き動かされて、嗚咽交じりの告白を続ける唇を、今すぐにも口づけて塞いでしまいたくなる。

「あなたの笑顔が好き。少し困った時の、しょうがないなあって表情も。時々頭の後ろに立ってる寝癖を見つけるだけで、どうでもいいことのはずなのに。新しい哲平を発見したみたいでとつても幸せな気持ちになれた」

告白はどんどん熱を帯び、やがてうっとりとした吐息を伴って、ズボンの内側に詰め込まれた肉棒の、猛り狂う先端へと吹きかかり始める。

「苦しそう……脱がして、あげるわね」

ドクン。心臓が、昂奮しすぎて充血する肉棒へ、期待を込めた鼓動を伝えた。口の中に溜まった唾を飲み込んで、ブラジャーに押し包まれたもちもちの乳肌へと視線を落とし、彼女の火照った肌もまた、窮屈そうに息づいていることを知る。

（ああ……真っ白い、きれいな……肌色）

透けるように白く、視界を埋めるほどにたつぷりとした量感を備えていて、見つめるだけでふにふにと弾む。じかに触れれば、きつとどこまでも指先が沈み込んでいきそうな柔らかそうな肌色が息づいていた。

告白の喜びと、肌色に触れたいと願う素直な衝動。あふれる感情に翻弄され、頭の中がぐちゃぐちゃに掻き混ざる。混乱する思考でどうにか現状をつかもうと努力する、その間

にも、刻々と状況は移り変わっていく。

プリンセスの手はズボンにかかり、一拍間を置いてから再度決意を固めたように真下へとずり下がる。

「ん、しょ……っ、ひゃんっ！」

べちっ！

「くうあつ……！」

考える間にもズボンは脱げ落ち、トランクスも一緒に脱がされて、すうすうと冷たい空気に晒された股間が身震いをした。そう、感じたのも束の間。なにか柔らかな感触を、解放されるなり飛び跳ねた龟头でぶってしまった。

「あ……やつぱり、とつても熱いわ、哲平の……」

ブラの上から右胸を押さえて、シャルロットがうつとりとつぶやく。少し赤らんだ乳房の上弦を見つめてようやく、男性器の先端でプリンセスの乳房をぶつたのだと理解する。

「シャル、ご、ごめ……んっ!!」

「謝らないで。とつても……哲平の気持ち伝わって、嬉しかったんだから」

ぴと、と唇に触れた彼女の指で、謝罪の言葉は寸断された。

「ほら……もう、こんなにドキドキ……してるの」

「え、あつ……！」

右手を取られてそのまま、招き寄せられるようにしてシャルロットの右乳肌へと接着する。予想通りの柔らかさと、少しの湿り気。しつとりと汗ばんでいるせいで吸いつくように指先が貼りついた乳肌の、予想以上の熱さに驚かされる。

(シャルのおっぱいに、触れてる……！ 指が、ずぶずぶ、う、埋まって……っ！)

丸出しの恥ずかしさを覚える間もなく。目にした光景のイヤらしさと、彼女の体温に触れた悦びとで、浅ましく膨れた肉幹が吼えるみたいに鼓動した。

「わ。あつ……すごいわ、哲平のも、熱くなって……ドクンドクンっておねだりしてる。んう……っ。風邪……ひいちゃったりしたら大変だから……あ、温めてあげるわね？」

いつもゆつたりと話す彼女にしては珍しく、早口で言い切ったのは——きつと、照れ隠しのため。

ずにゅううっ——！

「くう……っ、あ、ああつ！ シャ……ルっ！」

告白を受けてからずつと、翻弄されっぱなしだ。白い柔肌に魅せられて、じかに触れてその柔らかさに溺れながら、今は肉棒で、そのふたつの膨らみの谷間を割り裂いている。

真下から、少しだけ腰を浮かせたシャルロットの手に誘導され掘り進む。柔肉の詰まった谷間は、外側の乳肌以上にねっとりとした熱気を孕^{はら}んでいた。ブラをつけたままで寄せ上げられた乳肉が、谷間をむつちりと狭め、侵入した肉幹をギュウギュウと締めつける。

「恥ずかしいから……このまま。ごめん……なさい」

しばらく考えて、ブラを外さないでいることを謝られているのだと、ようやく気づく。

「い、いや、これはこれで……シャルのぬくもりが詰まってる感じが……とっても、っは、ああ……いい、よ……」

お世辞を言う余裕なんかあるはずもない。飾らない、本心のままの言葉だ。

「……嬉しい、とってもよ。胸の奥がキュンとして、息苦しいくらいドキドキしてる」

ふにふにと肉幹をマッサージする柔乳の絶妙な圧迫と、眩しいくらいに満面の、ほんのりと火照りと艶を含んだ笑顔。強烈なダブルパンチにあっさりとノックアウトされて、沸騰した脳天と肉棒がますます熱を溜めてゆく。

「今、すごく幸せな気分よ。哲平が胸の間でドクドク脈打って……とってもぬくぬく。ふわふわした、幸せな気持ちなの……」

ぎゅつと圧力を強め狭められた双乳の谷間で、こもりにこもった熱気に侵され、悶えるみたいに弾んだ肉幹の中心を甘い衝撃が駆けていった。

(シャルとキス、したい……っ！ もっと、強く……触れ合いたいっ！)

瞬間的に膨れ上がった愛しさに任せて、貪りたいと、願いながら。荒ぶる股間のたぎりに吞まれ、ぼんやり見下ろした先で、愉しげに細められた青い瞳に魅入られる。

「おっぱい、動かすから……下手だったら、言って……ね？」

ドクン、とひと際激しく心臓が、続くように肉棒の根元が脈打った。期待に打ち震える肉幹に、醜い青筋が浮き上がる。それすらしつとりと包み込んで癒やすように、滑らかな乳肌は吸いついたまま、ゆっくり、ゆっくりと上下に擦れ始める。

「はう、んっ……なんだか、むずむず、しちやう……ひや、あんっ、哲平の先つちよが、傘が開いたみたいになつてるところが擦れる、たびにつ、や、ああはああっ」

とつくに赤らんでいた頬に加えて、汗ばんで前髪を貼りつけた額と、ちらちらと覗く鎖骨からうなじにかけてのライン。ツンと上向く鼻の頭に、耳たぶまでを羞恥と昂奮の色に染め上げて、うつとり、夢見るように姫君がささやく。

熱く、爛れた吐息が亀頭めがけ吹きかかり、汗ばんでよけいにしつとりと貼りついてくる乳肉の狭間で、痺れるような快感に襲われて肉幹が脈打ち続ける。

「はっ、あく、シャル……っ！ 溶けちゃい、そうだよ……」

多分の願望を含んだ錯覚。彼女と、彼女のぬくもりと溶け合ってしまったいと、本気で願う陶酔とうすいしてゆく。

「うんっ……わたしも。わたしだって、ずっと哲平と一緒にいられるなら、哲平の熱にドロドロに溶かされて……きつと、とつても幸せな気分になれると思うから……！」

ぎゅうつと抱きつくみたい乳肉が肉棒を押し上げる。シャルロット自身の手で左右から圧迫された乳肌が、谷間を狭め、いっそう激しく上下に擦れ合う。

「う、あ……っ!? 今、なにか硬いのが擦れっ……うくうう、ま、またあっ!」

行き来する乳肉の突端あたりにある硬く尖った突起状のしこりが、何度も、何度も肉幹を引つ掻き刺激して、その都度甘い衝撃を牡の股間に蓄積させる。歯がゆいほどのもどかしさにたまらず自ら腰を突き上げれば、いつそう強く左右の突起と肉幹が擦れた。

「ん、ふうっ……や、ああああんっ! んっ、んあ! てっ、ぺ、あ、暴れちゃだめえっ……ちくびっ、感じすぎちゃうわ……っ」

たまらず喘いだシャルロットの唇からこぼれ出た、熱い吐息と、明け透けな単語。とろり滴るプリンセスの唾液の雫が、高揚し反り返る肉棒の先端を捉え、湿らせる。

「く……んうっ」

期待ではち切れそうになっていた幹が、挟み込む柔肉を揺さぶり立てながらドクドクと再び、より強い鼓動を打ち放つ。愛しい人の昂奮の証をじかに浴びて、ヌルヌルと唾液で滑りをよくした乳肉で扱かれ、包まれて。

「う……ふあ、あ……よだれ、こぼしちゃった。ごめんなさい、今……拭き取るから」
「え……? う、うああああっ!」

ぢゅうっ——。驚きに身を強張らせる暇もなかった。ハンカチでもタオルでもなく、プリンセスの薄桃に息づく唇で、滴った唾液を吸い取るように、亀頭が啜られる。

肉棒の根元に溜まった熱気が、今すぐ解放しると、しきりに脈動して訴えていた。頭の

てっぺんから腰の芯まで突き抜けた甘苦しい衝動に腰が勝手に跳ねて、反り返った肉幹がまたシャルロットの頬を打ち据える。

「あん。もう……あ、暴れないで？ 哲平の……甘えんぼさん」

そつと幹をつかまれて、また先端にキスの雨が降り注ぐ。鳥のくちばしのごとく窄められた唇で、つえばむみたいに、何度も、何度も。

「っあ、ああっ！ シャ、シャルつ、そんな……汚いからっ、あくうううっ！」

彼女の唇が触れるその都度、跳ねた腰が上唇のあたりにぶつかって、ピタンと卑しい音が響いた。形よく上向いた鼻先と擦れじゃれ合う陰毛の感触がくすぐったくもあり、ゾクゾクと背徳めいた感情を肉棒に溜め込ませる。

「汚くなんか……はむっ。ん、んちゅっ……ないもの。哲平の、好きな人の身体で、触れたくないところなんて、あるはずないんだから……ん、んちゅうううっ」

まったく、その通りだと思う。今も肉棒を左右から挟んで支えるふたつの肉マリ。たっぷりとした肉の量感に溺れそうになりながら、しつとり吸いついてくる乳肌にも、まるで食いつかれていくかのような錯覚さえ覚える。ずっと、触れていたい、ずっと、彼女の温みに包まれ溶け合っていたい。

一国の姫君に奉仕されているという昂奮と、愛しい人に触れ合える喜び。ふたつの想いは混ざり合い、相乗して高まり合って、肉棒の根元をズキズキと甘く疼かせる。気を抜け



ばすぐにでも達してしまいかねない。迫るその時を間近に感じ、ひとときわ膨れた肉先の傘を、乳肉に、自ら進んで腰を振って擦りつけてゆく。

「ふあっ！ あ、あんっ……今日は、わたしがしてあげようって、んく、思ってたのにい……っ。んっ、ちゅっ……ふ、ああっ、また、ビクンッて大きくなつたあ……」

また、熱く蕩けた吐息で尿道口のあたりをくすぐられた。背筋を駆け抜ける切なさに、ますます肉棒は反り、乳肉の谷間で鼓動する。

「は、ああう……ッッ！ 俺の……全部おっぱいに……隠れちゃって、る……！」

誘発されて呼吸を荒く乱し、吐きこぼしながら、腰をはね上げては乳肌のすべやかな感触を蹂躪し続けた。レース地のブラジャーで締めつけられ、姫君自身の手で寄せ上げられた乳谷を、摩擦するほど凶悪にくびれを増す肉傘で掻き分け、存在を刻むように掘削する。「ん……ちゅっ……んふふっ」

亀頭を吸って惹きつけておいて、目元だけで妖しく笑う。うつとりと細められた碧眼がそろりと視線を持ち上げて牡の視線と交錯した。たつたそれだけのことで、脊髓反射するみたいに肉棒を快感が奔り抜け、電撃を浴びたように全身が小刻みな痙攣を始めてしまう。意識しないままに伸ばした両手が、左右それぞれから肉棒を拘束する乳肌へ。レースの布地の上からたつぷりの肉マリを支えている、シャルロットの手のひらの上をかすめてから、たわわな膨らみの頂上あたりに接着した。

「んぷ……っ、やあんっ、さ、触られたらっ……すぐドキドキしてるの、伝わっちゃう……んっ、んんんふううっ!!」

「ごめん、我慢……できない、みたいっ……!」

一転、恥じらいに満ちた視線で訴えてきた彼女の意思を、できることなら尊重したい。けれどシルヴィアとの特訓で疲弊したはずの身体は、求め待ちわびた肌と肌との触れ合いに対し自制がまるで利かない状態にまで陥っている。

今も、ブラジャーの上に這わせた手のひらで揉み込むように乳肉をこねくり、つまんで、などで回しては肉欲をたぎらせていた。微細な指先の振動にすら悶え、その都度甘く息づくシャルロットの反応に歓喜する。しきりに脈打つ肉棒の先端で、とうとうくぱりと開いた尿道口から半透明の先走りがだだ漏れ始め――。

「んちゅ、ちゅううっ……ごくん。んんっ、に、苦あっ……哲平、これって?」

はあ、はあと息を継ぎながら、「おしっこなの?」なんて無垢な表情をして、そのくせ淫靡いんぴに頬から耳元までを薄紅に染め、唾液と先走りとでテラテラ濡れ光る唇でたずねてくる。

(だめだ、もう……!)

ズクンと疼うずいた肉幹の根元で、茹うだる白濁のマグマが装填され始める。我慢の限界を訴えるように前のめりになりながら、そっと艶やかな銀髪をなでつけた。

もしかして、と指先を上下左右に這わせてみる。

「はっ、あ、あああ……っ、だ、め……せっかく着付けてもらった着物、はだけちゃうっ。お、おっぱい出ちゃううっ」

指先の動きに合わせて、着物越しの乳肌はやわやわと形を変えた。こねる指を追うようにたぶたぶと揺れ、押し潰せばあっさりひしゃげ、引つ張ればどこまでも餅のように伸びてついてくる。

「シャル……ひよっとして下着、つけてないんじゃ……？」
締めつける物がまるでないからこそその柔軟な乳肉の反応。

こくりとうなずいて、あっさり事実を認め、シャルロットは逆に「どうしてそんなこと聞くの？」、そう言いたげに視線を寄越してきた。

「和服を着るときは、あ……っ、し、下着はつけないって、聞いたわ」
乳首をこねられる、その甘美な衝動に耐えながら、喘ぎ交じりの返答。

(確かに本来はそうだけど……)

でも今は普通に下着をつける人がほとんどだよ、だとか、ラインの出ない下着を身につけるって手もあって、なんて忠告しようとして、結局口をつぐむ。

今は、揉み込んだ手のひら全体で感じるたつぷりの肉感と、押しつけた股間で感じる湿り気を帯びた股肉の感触、より強く彼女の乱れぶりを感受できる状況に置かれたことを感

謝して、ただただおたがいを感じることに没頭したい。

「シャルの身体……すごく熱くなってるのがよくわかるよ」

モニユモニユと指先を沈み込ませる乳肉を、着物の上からこね潰す。同時に、はらりと舞う長髪の狭間はざまで隠れたり現れたりを繰り返す小ぶりの耳たぶに、こちら側の熱気を伝えようと息を吹きかけた。

「やあん……っ。哲平つたら、いじわるなんだから……あなたのだって、もう……」

——きゅっ！

「んくっ?! シャ、シャルっ、そこはっ……!」

柔乳を揉んで、うなじに吸いつき、幸福な気持ちで胸を、たぎる情欲で股間を満たしていたところに、思わぬ反撃を食って鼓動が弾む。

「ほおら、こんなにガチガチにしてえ……。熱いわ、手のひらが火傷やけどしちゃうくらい……んっ、ふ、ふわああっ……また、ビクンッてしたあ……」

俺の股間のモノが、それとも君の胸の先が——？

問いかける余裕すらなく、肉棒の根元、玉袋のあたりを後ろ手に回した右手のひらでやんわりさすられ、ゾクゾクと快楽の痺れが背筋を駆け抜ける。その痺れに溺れたように、二人とも、合計四つの瞳が揃ってトロリと蕩とろけてしまった。

「ん、しょ……ゴシゴシ、してあげるといい……のよね? 前に哲平のお部屋で見つけた

本に書いてあったんだから」

「うえあ!! い、いつの間に……っ、つく、あ、ああう！」

見つかつたのはどの本だろう。そんな疑問すら肉の快楽の前に押し流されて消える。

根元から幹に沿ってなで上がりながら、時折尻肉で挟んでは裏筋を爪先でくすぐるよう
に刺激されて、正直な肉棒はその都度ドクドクと、歡喜の鼓動を響かせ脈打つた。

「ん、ふあ……っ、ここね？ 哲平の気持ちいいところ。たくさん、たくさん擦こすつてあげ
るわね……くう、うううんっ」

手のひらと、尻肉を使って肉棒を摩擦しながら、彼女自身もまた甘い嬌声を響かせる。
恥じらいながらも大胆に揺れる腰つきと、二人きりの厨房内に残響する、乱れた吐息。

シャルロットも、感じている。そのことに気づいた後はもう、相手のぬくもりと昂こう奮を
感じる、そのことだけで頭の中がいっぱいになった。

「哲平の手……すぐ大きくて温かい……っ、ん、は、ああっ……ぎゅってされてるだけ
で、とっても幸せな気分、やはうっ！ な、なるのお……っ」

着物の上からでもはつきりわかるくらいに勃起した乳首を左右、時間差でつまんでコリ
コリとこねる。告白を中断されたことを腫とがで咎めてきて、けれどすぐに胸先から伝わる甘
い刺激に、シャルロットは酔い痴れてしまう。いっそう揺れ幅を広げた尻の谷間で、挟ま
れた肉棒が火照り狂い、溜まった熱気と肉欲とを吐き出すみたいに脈動を続ける。

「有馬の奴はどこに行つたのよ？」

「はて。そういえばお見かけしてませんね」

「お兄ちゃんなら、確かシャルロットお姉ちゃんと厨房のほうに行つたよ」

（聖華さん、根津君、マリアちゃん。すぐ、近くにみんないるんだ……！）

壁一枚。扉一枚隔てた向こうで、仲間たちが楽しげな声を聞かせてくれている。その声の通り具合。厨房内の二人の状況を知らないで、遠慮なしに響く足音の距離感から、彼女たちが間近にいることを再認識し、背徳めいた高揚で胸高鳴らせる。

「シャルロット殿と……二人でか？」

「まったく。自分たちで呼んでおいて客をほつたらかしたなんて。どうせいちゃついでるに決まつてるわ」

「聖華様……りんごのように赤らんだお顔も素敵です……」

見事な指摘にドキリとし、直後のうっとりとした綾乃の物言いに、また別の意味で鼓動が跳ねた。

新たに用意した三つの土鍋が小ぶりだったことと、運び出すのが容易だからと厨房に近い位置から順に並べていったこと。広大な食堂の半分も使っていない配置が、仲間たちをより厨房に近い距離に固まらせる結果を呼び込んでしまった。

「みんなの声が、聞こえるわね……や、はああ、んっ……哲平ったら、声に反応して大き

く、してるうう……」

「シャルだつて、手と腰の動きが大胆に、うあつ！ 大胆に、なつ……て」

二人、同じように状況に酔い、昂たかぶつてゆく。

「あ、ああつ……もつと、強く」

陶然としたシャルロットの聲が肉棒に響いてまたドクリと雄々しく吠える。

「苦しそうにしてるから、出してあげる、ね……？」

「あ……うう！ シャッ……んくう！」

あつさりと位置を特定され、袴の結び目がほどかれる。間髪入れずに、いつもののんびりぶりが嘘のような素早い手つきで羽織の裾がまくられて、白く柔らかな指先が侵入した。襦袢じゆばんの内側にこもる熱気をまさぐりながら進む、少しひんやりとした指先に内腿をなでられ、引き攀つたように下肢が震える。前触れなく訪れた刺激に抗うこともできずドリと先走りのツユが下穿きの中に噴き漏れて、よりいっそうの熱を溜め込んでしまう。

「みいつけた……♪」

下穿きの上端からもぞりと這いずり忍んできた、冷たい五本の指できゅつと握られ、肉棒が跳ねる。

「……ツツ！ ひんやりしてて、シャルの指つ、すごい、いいつ……！」

「出してあげるね……？ 窮屈な穿き物の中から出して、直接わたしのお、お尻に……つ、

ん、ふあああああつ……!!」

直接、シャルのお尻と。魅惑の光景を想像してより硬く強張った肉幹が、白い指の拘束を振り払おうと跳ね回る。自然、圧力を強めてきたシャルロットの指に肉棒の根元から搾られて、腰の芯で熱い塊がうねり出すのを知覚した。

ず、りゅッ……!!

「は……あああぐつ……!!」

細指に巻きつかれたまま下穿きから引きずり出され、まくれた長襦袢ながじゆばんと羽織をくぐつて、勃起した肉欲棒が外気に触れる。こもった熱は幹にしがみつき包むシャルロットの手のひらとの間に溜め込んだまま。剥き出しの亀頭が、弾力に富んだ尻の感触と、着物のすべやかな心地とに触れて、先走りを大量に噴き漏らした。

「ひゃああんっ! か、硬あいつ……お尻、焼けちゃう……」

肉棒の熱にも負けないくらい熱い吐息と嬌声とを漏らして、シャルロットの腰がよじれる。わずかに空いた隙間から熱が逃げてゆく。そのことがたまらなく切なくて。

(シャルのお尻も……っ、直接、もつと……!!)

隙間に差し入れた右手で、帯をほどく。

「きやつ……」

彼女が可愛らしい声を上げ身を丸めようとした隙を見逃さず、はだけた襦袢と着物を一

緒くたにまくり上げて、目的の場所を凝視する。

シャルロットの股間。尻側から見たそこは、少し脚を開き気味のせいもあって、暗がりながらもツユが煌めいている様子がはつきりと見て取れた。

「も、もうっ。せつかく着付けてもらったのにい……」

「ごめん。でも、どうしてもシャルともっと……じかにくつついていたかったから」

言い訳をしながら腰を押し出し、目の前の三角地帯。シャルロットの股下のわずかな隙間へと肉棒を押しつける。

「ひあっ！ あん……てっ……ぺい？」

不安そうな瞳で彼女が振り向き見つめてきた。安心させるように何度かうなずき合ってから——ず、ぬりゆりゆっ……。

ゆつくりと、腰を突き出してくれたシャルロットの内腿の谷間へと肉棒を押し入れていく。壁に手をつき、素股のしやすいように体勢を整えてくれた彼女の身体が緊張と不安と昂奮とをない交ぜに強張っている。

「あ……ん、ぎゅっとして……」

求められるままに抱き締めて、同時に前に押し出した肉棒が内腿の谷間を貫き通す。カリ首が腿肉に擦れる時の刺激が腰の芯にまで響いてきて、どぶどぶと先走りの汁を狭い谷間で吐き出した。

「うあ。あつ……くう……!!」

とつさに歯を食い縛らなければ、漏らしてしまっていたかもしれない。大量の、射精と見紛うかのような濃い先走り汁が、滴りながら愛しい人の腿肉に絡まり、染みてゆく。

「あはう！ またビクンビクンって、お股の間で、は、跳ねてるうう……っ！」

むずがる彼女が腰を振る。モジモジ恥じらって内腿が擦れ合う、そのたびに肉付きのよい腿肉でみっちり挟まれた肉棒の先端——エラの張った傘の部分が摩擦を浴び、歓喜の脈動を響かせた。両腿の圧迫によりカリの手前で堰き止められた鼓動は、痺れるような快楽を伴って幹の根元に堆積していく。

「シャル……っ、少しの間だけ、じつとして……！」

「ふえ……きやあああんっ！」

ず、ぬりゆつ、ぬぶぶぶぶ……。

手のひらにとても収まりきらない尻たぶをつかんで引き寄せ、ぴったりと密着する。肉棒の根元に茂る陰毛がくすぐったいのかしきりに腰を振ろうとするシャルロットの動きを制しておいて、押し出した肉幹で剥き出しの彼女の股間を強かに搔いた。

「ひや、ああっ……ズリズリ、きてるうっ、ふあ、あはあああ……っ！ そ、んな、あつ、あああつんんう！ 強くしたら、はっ、恥ずかしい音が鳴つちや……くうん！」

幾度となく、止め処なく股間の隙間を往来させた肉幹に、ぼたぼたと滴る蜜が絡む。紅

潮し昂奮でふつくらと膨れた陰唇を擦るその都度、甘い痺れが肉棒を駆け巡り蓄積されていった。摩擦の回数を重ねるごとに染み出る蜜の量は増して、やがて掻き混ざり、グチグチと卑猥な粘着音を響かせ始める。

「ゆつくりがいい？ それとも……」

最初は緩やかに、デリケートな箇所をなでるように幹でさすつてゆく。

「やつ、あ、はあ、うう………哲平の、いじわるう………」

シャルロットの内腿がもぞもぞ擦れ、挟まれた亀頭がまた悦びの鼓動を轟かせ、噴き出した先走りが彼女の下肢を伝う。その様がまるで、シャルロットがお漏らししたかのように映り——言い知れぬ情欲に襲われた心臓がドクリと跳ねた。

ぐち……ぬぢゆ、ぶう………

「は……ああああ………っ！」

ゆるゆると腰を振る。それだけで大量の蜜が、焦れて揺らめく尻肉の谷間からこぼれ出てきては牡の幹にまぶされていった。

「いじわる、しな、んはあああっ!!」

ぬぷうっ！ にゅぢゆにゅぢゆにゅづうううっ！

我慢しきれずがりついてくるところを狙い打ち、量感たつぷりの尻に思いきり腰を叩きつける。そのまま素早く前後にピストンして、恋人の肉と心をこれでもかと揺さぶった。

「っ、ゆっくりでも、早くしても……シヤルのあそこはドロドロになっちゃうんだね？」

愛しい人の返事を待つ間、徐々に摩擦の速度と圧力を強め、答えをせつつくように肉勃起の先で股間のスジを突き上げる。その都度尿道口から流入した快楽の痺れが少年の下肢を突き抜け、ますます腰の動きは大胆に、激しさを増していった。

「くあんっ、やつ、あぁはぁあぁ……も、もつと、おおっ」

「っ、はつきり……言つて欲しいな」

摩擦に乗じた肉欲のたぎりで肉幹はすでにパンパンに膨張し、悶える彼女の内腿の締めつけも相まって、いつ暴発してもおかしくない。それでも歯を食い縛り射精欲求に、甘美な誘惑に耐え忍んだのは、ひとえにシャルロットの口からおねたりが聞きたかったからその一念に尽きた。

「……っ、もつと、っ……よくうう。てっぺ……えっ！ ああなたの、好きなようにっ、ズリュ、ズリュつて擦つて欲しいのおっ……！」

「わかったよ、じゃあ……いくね？」

どうにか平静を装い言い終えて、すぐさま行動に反映する。

ぐりゅっ……ぬりゅっ、ぶつぶぷうっ……。

「ひぁあぁあぁっ！ ンッ、ンンッ、いい、つよお！ てっ、ぺ、んふううンンッ！」
幹を押しつけるように圧力を強める、ただそれだけでジュプリと蜜はあふれ、小刻みに

震えるシャルロット自身の内腿を伝い落ちて床に水溜まりを無数に作っていく。

ばばんっ！ ばんっ！ ばぢゅ！ ぶびいっ……にゅぢゅぶぶ！

続けざまに加速して擦り立てる恥肉から、グチュグチュとはしたくない音色が響き、粘性の強い愛液が滴り落ちてくる。

蜜と摩擦熱にまみれた肉幹が歓喜の胎動を響かせる。応じてヒクつく膣口に龟头をくすぐられ、汗と蜜と先走りとでぬるぬるの、もじつく太腿にきつくきつく搾り取られて、幹の中を迫り上がる衝動が、少年のまぶたの裏を白く染め上げていく。

(はあ、ああっ……シャルが喘ぐたびに、腰の芯が、し、痺れるうう)

彷徨う視線の先で、たぶたぶとシャルロットの豊乳が垂れ下がっているのが見えた。前屈みの彼女の胸元。はだけた和服では隠しきれない、重力とたつぷりの重量に負けて垂れた、母性の象徴。綺麗な髪が遊ぶ背中に覆いかぶさるようにして距離を縮め抱きつくと、すぐさま指先にコリコリと硬い感触が突き当たる。

「ひあんっ!? や、あっ、おっぱいも一緒に、なんてえっ……よ、よすぎちゃうのおっ。感じすぎっ、ひぐううう！ んっんふあ！ ちくびっ、いいいいっ！」

ぎゅっつつまんだコリコリ——左右それぞれの乳先で咲いた桜色のポッチをこね回す。見る間に表情を崩して歓喜の声を上げるシャルロットの、振り向かせた口元からこぼれたよだれをなめ取りながら。



みっちり詰まった膾内で吐き出した、先走り汁のおかげでかろうじてわずかな抽送が可能になってくる。それほどまでに、貪欲に絡みつく膾肉の締めつけは強烈で、気を抜けばすぐにでも射精してしまいかねない状況が続く。

「んあん！ あ、ああつ！ うん、溶けちゃうくらい、して……！」

いきなり最高潮なのは、彼女も同様だった。惚けた瞳を欲情させてうっとり細め、垂れ下がった眉根に貼りついていた前髪が、震えに乗じて剥がれ、はらりと舞う。口元から垂れたよだれが母乳まみれの乳の谷間に滴って、いっそうヌラリと淫靡な化粧を施してくれた。

グチグチと結合部からは淫猥な粘濁音が響く。肉体的な快楽を、視覚的、聴覚的な刺激がよりいっそう盛り立ててくれる。

「う、あ、あつ！ 熱い……シャルの中から漏れてきてるっ……！」

硬く張りつめた肉棒を濡れた恋人の秘芯に押し込めるたび。そして貼りつくヒダをゆっくりと引き剥がし、甘美で碎けそうな腰をやつとの思いで引き抜くたび。潤んだ膾穴の奥からは熱く蕩けた蜜汁が漏れ出て、肉幹を伝い、根元まで滴り湿らされる。

内部の熱気をそのままパックした蜜汁の火照り具合に驚き、浸された肉棒はますます硬く、彼女の中で反り返っていく。

「ひああああ……わたし、もっ……！ わたしもよっ、中がとつても熱くて、し、幸せ

なのおっ」

胎内を占拠される恋人は、満たされた表情を反らして身悶える。おたがいの熱が相手を昇らせてはさらなる欲熱を引き出し、二人、揃って高まってゆく。

「ああ、俺も、シャルと同じ気持ちだよ……っ！」

とても幸せで満ち足りた感情に支配され、若い牡肉は貪るように恋人の膺を掘り進む。吸いついて離れたがらない肉ヒダを強引に引き剥がしては、また深部で待ち構える新たなヒダの歓迎を受ける。くすぐるように絡んでくるものもあれば、最初から肉棒を食むように強烈な締めつけと吸引を加えてくる箇所もあり、突く角度を変えるたび肉棒に新鮮な刺激が奔った。

「あっ……あん、んっ、ふ、うん！ てっぺ……脱がせ、て……？」

突き上げられて煩悶する彼女がうわごとのように、汗で貼りつくドレスを脱がして欲しいと懇願した。応じて彼女のドレスをビスチェごと引き下ろし、すでにシャルロット自身の手でしわくちやのスカート部分と合わせ、腰のあたりでまとめてしまう。

「しわだらけになっちゃったね……」

「いい、の……綺麗なドレスも、豪華なディナーも、もういらぬもの……今は、哲平が……あなたがそばにいてくれる。そのことがわたしの一番の幸せよ……？」

束の間、腰の動きを止めて見つめ合い、息を整える。汗だくの素肌を晒したシャルロッ

トの肩先が、寒さに怯えるように震えた。

それを見咎めてすぐに、いてもたってもいられなくなり、上体を起こす。

「きやつ……ふああつ！」

起き上がりざまに揺すられた恋人の身体が切なげに反り、奥を小突かれた彼女の腰が小刻みな痙攣を繰り返す。不規則な締めつけにおびやかされる肉棒からの、甘美な痺れに耐え忍びながら、目の前にある白い肩先をそっと抱き寄せた。

対面座位の体勢となつて、また相手の高揚を探るため、視線を絡め見つめ合う。

「や、あん……哲平の、中でパンパン……赤ちゃん、驚いちゃう……！」

咎めるような口ぶりとは正反対に、甘えるみたく肌をすり寄せしがみつく。そんないじらしい姿に胸打たれ、再度視線の先で揺れる彼女の乳肉を左右同時にもみ潰した。

「ひあつあああんつ！」

柔い、指先を吸いつけて離さない乳肉を、円を描くようにして周囲からこね、乳頭の隆起を煽る。次いで乳首の周りをくすぐるように引つ搔く。

「て、てっぺ……？ 切ない、わっ……は、早くうう」

もじつく彼女の尻の下。結合部で掻き混ぜられ、泡立った蜜汁があふれておたがいの股間をドロドロに濡らしていた。上下のみならず、前後、左右。昂奮に溺れるにつれて大胆さを増したシャルロットの腰の動きに翻弄され、股間が快感一色に染められる。

「ツツ……ごめんね、シャル……つ。あんまり、シャルの腰がエッチだから……ああつ」

肉棒の根元が引き絞られたかと思えば、幹がねつとりとした蜜で覆われ。幹がヒダの歡迎を受けて震えれば、亀頭に貼りついた子宮口がチュウチュウと染み出たカウパーを吸り取る。恋人の動きに乗じて肉欲は一足飛びに高まり、彼女の乳肌を揉む指にも力がこもる。けれど、まだ。ピンピンに尖った薄桃の乳頭部分には、指先一つ触れてあげなかった。

「ひうつ！ う、うんつ……もううつ、いじわるつ……。うう、き、嫌いに、なつちゃうんだからあつ……！」

拗ねてるだけ。冗談だつてことぐらいは、蕩けるように乱れた恋人の表情を見ればわかる。それでも罪悪感に突き動かされ、恋人の腰により強く腰を押しつけた。

「つああ……！！ シャ、ルつ……！」

深まった結合部から、強烈な肉の快楽が湧いて出て、震えた肉棒が子宮口にすり寄り、たつぷりと濃い先走り汁をすり込んでゆく。

「ひやああんつ！ ふ、深いの、あつあああつ！ ひつ!? あ——つ！」

散々焦らしておいてからゆつくりと指の腹で押し潰した、勃起乳首が震えて跳ねる。

ぶしゅつ……ぶつしやああああ！

乳白色の母乳が手のひらにぶち当たり、指と指の隙間から勢いよくしぶく。甲高く、陶酔した叫びに合わせ、何度も、何度も。噴き出る母乳の勢いは一向に衰えず、同時に肉棒

を食い締める膣肉の圧力をも増していく。

「~~~~ツツ!!」

求めに応じれば応じるだけ、彼女もまた喜びに溺れながら、すっかりたぎった肉欲棒の求めに応え、膣内を蠢かせてくれる。

大量の精液を充填して張りつめた、快楽漬け状態の肉幹を受け止め、ねっとり隙間なく包んでくれた。たっぷり蜜をまぶされて、とうの昔に射精準備の終わった肉幹を愉悦が貫いてゆく。

「ひっ、あ、あっ！ んっ、ふ、ふあ！ てっ、ぺ……わた、わた、し、いつ、ま、また……ああああっ！」

我慢できずにズンズンと、真下から膣内を掘り進み、捉えた子宮口を目一杯突き上げた。今また臨界を迎えようとしている肉幹に、ビキビキと限界を伝える青筋が浮く。収まりきらない肉悦が、あまりにも濃い、糸引く先走り汁となつて恋人の膣内に噴き出て、こびりつく。それに合わせて彼女の声のトーンも跳ね上がり、膣肉はリズムをいっそう乱してがむしゃらに、ひっきりなしに牡肉へとしがみついていた。

「おっぱいもおっ、ジンジンするのっ、切なくて、でもすぐくっ……恋しくてええっ」

きゅっ、きゅううっ……ぷしゅっ、びゅっ、びゅびゅううう！

瑞々しく、汗すら弾く乳肌に指を食い込ませ、こねくるようにして搾乳する。

「ひやあう！ ミルクまた、れてるっ……あは、あつ、あアア……ッッ！」

「んっ……ぢゅっ、ぢゅづづづぢゅりゅりゅううう……！」

それらの回らなくなった唇と、乳白色に濡れた乳房。迷った末に、右の勃起乳首へと唇を寄せ、口内になみなみと、たぷつくほど恋人の乳汁を吸い上げた。

「吸っ、て……んっ、くふううんっ！ そこっ……哲平と赤ちゃんの、だから、たくさん、たくさんっ……幸せにしてええ……っ！」

かすれた声を張り上げて、ぎゅっと抱きついてくる。胸を張るように差し出された乳頭はコリコリと硬く、舌先で転がせばすぐにビクリと飛び跳ね、蜜を漏らす。軽く噛むだけで、甘えたみたいにすり寄りながら口内を乳白汁で満たしてくれた。

（また……一緒につ、二人で……一緒につ！）

シャルロットの、どこもかしこも柔らかい肢体を受け止めて、ひたすらに下から腰を突き上げ続ける。

もう、すぐそこにまで差し迫る、二人揃っての絶頂。心と身体に染みついた至福に向けて、見つめ合う二人の気持ちは一緒だった。

「ふ、っ、ふううっ……シャル、俺っ……！」

「うん、う、んっ……わた、しもっ、も、う……っ！」

ギシギシとベッドが鳴る。汗と嬉し涙とで潤んだ瞳に映る、天井の照明がゆらゆらと揺



らめいて見えた。なのに、恋人の嬉しそうな顔と、胸をつんざく甘い喘ぎだけははつきり、鮮烈に受け止めることができて。

脇によじれたレースショーツの奥からじゅわりと染み出る恋人の蜜汁を、また押し戻すように蜜壺を掘削する。その間も、指を食い込ませたままぶるんと弾む、魅惑のバストへの愛撫は止まらなかった。

「ひあはっ、あ、ひやあああ……っ、ら、め、もっ……んふうううう……！」

指と指の谷間からむにゅりとはみ出た乳肉に、あふれた母乳が滴った。時折なめ上げてやりながら、口に含んで、喘ぐ彼女の唇にキスをする。自身の漏らした母乳を味わった、シャルロットの舌先がむしゃぶりついてきて、唾液が絡まり、男女の舌先が糸の橋でつながっていた。二人、揃って酔ってゆく。

(シャルと……っ、このま、ま、ああっ……！)

このまま、溶け合ってしまったいと、強く願った。

肉ヒダはいっそうざわめいて牡肉を食い締め、先走りを啜っては蜜を噴く。潤んだ膣内でグボグボと攪拌され泡立つ混合液の、淫らな音色が奏でられる。強烈な摩擦と温みに、腰の芯から迫り出した射精の予兆は、一気に頭のとっぺんまで突き抜けた。

「っは、あああっ！ シャルっ……一緒にツツ！」

応じるようにキュウとすがりついてきた、彼女の太ももに腰を押さえ込まれ、同時に膣

壁にみっちり肉幹が閉じ込められる。

厳しい膣肉の収縮に、もう少しも前に進むことすらできないのに、彼女の両脚を貼りつけたまま、腰の動きは止まらなかつた。すでに先端で捉えていた子宮口を、こじ開ければかりに打ち据えて。

「ん、んんうっ！ てっ、ふえっ、わら、ひいつ……ふわふわ、ひてるろっ、も、もお！ ひ、ああ！ きちやうっ……ううんっ、んああ！ 大きいのがあああっ！」

甘噛みした左乳首を引つ張りながら解放して、しきりに限界を訴える唇に再度己のそれを重ねる。背中にしがみついていた恋人の指が爪を立て、わずかな痛みと幸せなぬくもりを継ぎ足してくれた。

「んむあ……!? んっ……ふあ、あむうう……っ」

ぢよぼ、ぢよぼぼぼぼっ……。

ぶるりと震え、羞恥と隠しきれない昂奮とを含む熱い吐息が重なる口内を満たしてゆく。白いシートと、重なる肌と肌の隙間を伝う恋人の尿液が、ぬくもりでもって心の底まで満たしてゆく。

むずがるようにうねる膣肉に絞られ、勃起の根元から抑えようのない悦びが、塊となつて噴き出して——この上なき至福が、たぎる欲熱を後押しするように全身を巡り、身も、心も充足していった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>